

特定非営利活動法人 緑地雑草科学研究所

IUWS

「目次」

総会開催のお知らせ	1
活動報告：2022年1月～3月	
雑草インストラクター認定	1
「草と緑」アクセス情報	3
会員投稿記事：文献紹介2編	3



総会開催のお知らせ

令和4年度の総会につきましては新型コロナウイルス蔓延の影響を考慮し、昨年、一昨年に引き続き書面表決にて実施いたします。皆様のお手元にメールまたは郵送にて総会案内が届いているかと思いますので、“書面表決書”ご記入の上、3月25日（金）までにご提出いただくようお願いします。

コロナも終息せず皆様と顔を合わせる機会がなかなか作れないのが残念ですが、今後計画しているオンライン講演会等の活動を通じて、情報発信や意見交換に努めていければ、と考えています。

（事務局長 佐治健介）

活動報告（2022/1-3月）

新雑草インストラクターが認定されました

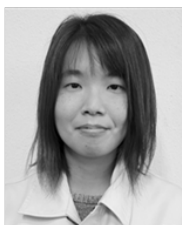
本法人が運営しています「雑草インストラクター養成事業」により2021年に養成講座を受講し所定の成績を収められた次の8名に対して、本年2月21日

開催の理事会において「雑草インストラクター」の資格が認定されました。



谷山英世（株式会社オーレック）

今回の講座を受講したことで、これまで知らなかった雑草の生態や特性を学び、雑草管理とは何なのかを学ぶことができました。これまでのモノづくりに特化していたわが社の生産活動だけでなく、コトづくりに向けた今後の取組みについても考えさせられる機会になりました。その為に必要な情報、その整理の手法など、日常業務でも参考になるような手法も教わりました。わが社製品だけでは、雑草管理という観点で出来ることは、限られているので、今回一緒に受講させて頂いた、企業の皆様とのネットワークを通じて、社会に貢献できる手法を考えていきたいと思います。



徳田有美（株式会社白崎コーポレーション）

雑草のことといえば徳田さんに聞けば間違いのないといわれるような、信頼のおける雑草インストラクターとして活躍していきたい。現在は農業分野での雑草問題を多く相談いただいているが、防草シートの販売に重きを置いてそのほかの問題解決のプロセスはどこか頭の隅に置いてしまっていたように思う。今後は今回学んだことを生かし、総合的な雑草問題解決を目指していきたい。また、お客様や雑草にお困りの方からヒアリングしていく際にもヒアリングの能力が問われてくるだろう。今後はその技術を磨き、本当に困っていることは何かを理解し、それを解決できるようにしていきたい。



吾郷泰三 (日本ワイドクロス株式会社)

弊社では、農業用の防草シート「アグリシート」を製造販売しております。昨今、防草シートの使用現場が増加する一方、雑草管理の適切な管理プログラムが策定されておらず、施工業者や、施主（農家様）に向けて「防草シートの雑草管理技術」が伝わっておりません。弊社としては、準備期間が必要ですが、1年を目途に弊社に「雑草管理相談窓口」を開設し、雑草インストラクターとして「防草シートの雑草管理技術」の標準化に努めたいと思っています。また、雑草インストラクターとして農家様の様々な雑草のお悩みを解決する事により、10年、20年と続く農業の下支えになり、信頼される「雑草インストラクター」になりたいと思っています。



青山治彦 (日本工営株式会社)

雑草インストラクターとして、雑草の維持管理全般に積極的にに関わり、知識に裏付けされた価値を創造することで、現在、雑草が無作為に生えて雑然としたところを、一つでも多く「居るだけで落ち着く、癒されるような空間」になるよう世の中を変えていきたい。この過程で、雑草管理が、ボランティアや単なる除草作業ではなく、世の中でしっかりとした職業として認知されるようになることを目指したい。そのために、草とセットの樹木のこと、建物のこと、場に来る人との関わりについても知見を深め、そこに土木コンサルタントとして培った知識も統合していきたい。



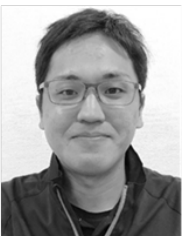
原口幸大 (株式会社白崎コーポレーション)

今回、養成講座を受講し雑草の生態やそこから引き起こされる問題と解決方法だけでなく、どのように雑草問題を理解し取り組んでいくかを学びました。私の場合は地域の農家の方から相談を受ける機会が多く、相談者の方の思いと現場の状況から対策すべき相手とことが何かを導きだすことがまずは最初の重要な任務と感じました。そこで本当の問題を見極め、相手が求めることに適した提案をし、相談者との信頼関係を築いていけるように努めていきます。当社では解決できない問題もありますので、その時には他のインストラクターの方のお力もお借りし、雑草問題解決に取り組んでいきます。



石村文人 (株式会社オーレック)

現在、社内にて有機農業推進グループとして活動していますので、有機栽培農地や有機 JAS 認証農地、GAP 認証農地における雑草管理および指導などのビジネスモデルを作り上げていきたいと考えております。そのためにまずは有機農家様から、現状の課題や原因などの情報収集から始めていきます。また、機械メーカーとして機械の出来ることを理解し機械の不適切な雑草防除とならないよう社内の情報共有および発信を行っていけるように努めてまいります。



小田裕二郎 (株式会社オーレック)

雑草インストラクター養成講座では、雑草がもつ特性や環境に及ぼす影響等を知ることができ、自分自身の雑草に関する知見を広げられたと感じています。また、知識を得るだけでなく、それを活用し雑草を管理する方法を普及することが雑草インストラクターの役目だと思うので、今後もより多方面からの知識を習得できるよう積極的にセミナー等に参加し、私たちを取り巻く様々な雑草管理に関する問題を解決の方向へ導く力を養い、発信していきたいと考えています。その為に全国各地の雑草インストラクターの方々とも連携を深め、それぞれがもつ技術や知識等を共有・理解することで場面に合った適切な雑草管理の手段・方法を模索していきたいと思っています。



田嶋祐治 (農業経営)

今回、取得するに当たって、どのように活動していきたいかについてはまず、自分にかかわりの深い農地の雑草対策、管理から初めて行きたいと思っています。そこから農道、草地へと広げていき総合的な分野に発展させていきたいです。小さなところからコツコツと進めていき、広げていきたいです。

順不同敬称略

「草と緑」の記事はどれほど読まれているのでしょうか？

「草と緑」は第 1 巻から 13 巻までの 58 編の記事すべてが J-Stage (総合学術電子ジャーナルサイト) に掲載されており、現在、誰でも無料でアクセスできます。そこで、第 12 巻から完全に電子ジャーナル化

したのを機に、「どの程度読まれているのか(≒PDF がダウンロードされているのか)」を、毎月送られてくる詳細なアクセス統計データから読み取ってみましたので、その概要を報告します。

会員によるアクセス状況

刊行直後の 1 か月のアクセスを会員によるものと推定したところ、冊子配布を止めたあとの第 12 巻と 13 巻では、会員 (個人) の約 80% に当たる方からのアクセスがありました。また、冊子配布を行っていた第 11 巻でも、約半数の会員が個別記事のダウンロードを行っておられたことが分かりました。

全国・世界でのアクセス状況

2021 年 1 年間の状況をまとめたところ、総計 11,921 件、計 29 か国より第 1 巻からの全記事にわってアクセスされていることが分かりました (英文表題もなかった第 6 巻までの記事も多く含まれています)。アメリカ、中国をはじめ海外からのアクセス数は 1 年間で 2,782 件に上っていたのは驚きです。言語の壁をクリアする手段がいろいろ存在する今日、コンテンツに優れた記事を発信することの重要性を、あらためて感じた次第です。

第 11～13 巻の各記事への会員アクセス概数

巻	記事(4編)のアクセス数	(会員数)
第11巻(2019)	68, 69, 99*, 48	(132)
第12巻(2020)	114, 115, 113, 111	(141)
第13巻(2021)	167*, 109, 80, 107	(130)

*多いのは教材として使われたため？

2021 年における年間総アクセス数

日本	9139	ドイツ	96
アメリカ	1812	イギリス	60
中国	528	香港	57
韓国	123	シンガポール	36
その他 < 12	トルコ, キプロス, 台湾, オランダ, カナダ, マレーシア, ロシア, チェコ, モンゴル, フランス, セーシェル, ベルギー, ボリビア, ブラジル, インドネシア, インド, ボーランド, パラグアイ, ルーマニア, ベトナム, 南アフリカ		

(「草と緑」編集委員長 伊藤操子)

会員投稿記事: 文献紹介

輸入穀物に混入して侵入する雑草の侵入個体数と定着成功との関係

Mafumi Ikeda, Takeshi Nishi, Motoaki Asai, Takashi Muranaka, Akihiro Konuma, Tohru Tominaga & Yoshiko Shimono 2022. The role of weed seed contamination in grain commodities as propagule pressure. *Biological Invasions*.

<https://doi.org/10.1007/s10530-022-02741-6>

日本は毎年約 2500 万トンもの穀物 (トウモロコシ,

コムギ, オオムギ, ソルガムなど) を海外から輸入している。輸入穀物の中には、輸出国の農耕地で生育していた様々な雑草種子も混入している。輸入穀物に混入して侵入する外来植物には農業害草となる種類も多いため、侵入初期に発見してその盛衰を追跡することは、外来植物の効果的な予防管理にも役立つ。全国の国際貿易港 20 港で春と秋に植生調査を行い、穀物の輸入量が多い港 (穀物輸入港) と穀物を輸入していない港 (非穀物輸入港) の植物の組成を比較した。

さらに、穀物輸入港で多く見られた種が輸入穀物にも多く混入しているのかを検証した。

各港の植物の種組成の類似度を計算して分類したところ、調査した 20 港は、北から南まで緯度に沿った違いがあることが確認できた。さらに、穀物輸入港と非穀物輸入港間で植物の組成が異なることも示された。つまり、港湾周辺に生える植物の種組成は、気

候の違いに加えて穀物輸入港か否かによる影響も強く受けていた。植生調査の結果と輸入穀物への混入率との関係を調査した結果、穀物への混入量が多い種ほど穀物輸入港に偏って生育している傾向が認められ、穀物輸入港周辺での外来植物の定着には、輸入穀物への混入量が強く影響していることが示された。

根茎系を標的とした除草剤の冬季土壌灌注処理によるイタドリの制御

Misako Ito & Kanji Ito 2021. Japanese knotweed control with winter soil injection of chemicals targeting the rhizome system. *Weed Biology and Management* 21, 202-208

地下拡張型多年生雑草の制御には通常師部移行性茎葉処理剤の適用な最適とされているが、立枯れ雑草による景観の悪化、飛散による周辺生物へのリスク、経済的でないという問題がある。著者らはこれらを排除した的確な防除法として、除草剤を直接根茎系の分布域に届ける土壌灌注法の確立を目指してきた。さきのポット試験 (*Weed Biology and Management* 21 (1) に掲載) により薬剤の各種根茎への直接効果を確認し、実用への可能性が明確になった。今回は、英米でも侵略的外来雑草として非常に問題視され、かつ未だ適切な制御法が存在しない大型根茎雑草イタドリ (*Fallopia japonica*) に対して同方法の実用性を検証した。鉄道のり面に広がるイタドリ集団に対

して、3 月上旬 (萌芽前) に、クロルプロファム (230mg/L) またはテブチウロン (100mg/L) を株元当たり 1L、15~25 cm の深さに灌注した。灌注の深さや間隔については、イタドリ根茎の掘り取り調査および灌注液の拡散の予備調査から決定した。処理後のイタドリシュートの生長には、クロルプロファム処理では 5 月段階から、テブチウロン処理では夏季以降に顕著な抑制が認められたが、いずれも美観を損ねる枯込み症状は呈さなかった。生育終期の根茎量は生重での対無処理比がクロルプロファムでは 6%，テブチウロンでは 18%にまで減少した。また、テブチウロン処理区の根茎からの萌芽・発根力は著しく低下していた。以上から明らかな貯蔵養分の減少 (茎葉生長抑制による)、根茎量の減少および根茎萌芽力の低下は、翌年の生長にも総合的に作用することは確実であり、適切な除草剤の冬季土壌灌注を繰り返すイタドリの根絶もしくはそれに近い抑制につながると考えられる。



ニュースレターの編集を下さる方を募集しています

詳細は、メーリングリストから追ってお知らせします。
ご応募をお待ちしています。

<ブルーと黄色にご注目を>